

バイ資源の現状に関する調査

(浅海増殖試験)

清川智之

1. 研究目的

バイ資源は全国的にみても有機スズが原因と考えられている雌の雄化(インポセックス)により、資源が大きく減少しているとされるが、本県でも漁獲が激減している。そのため、まず現状を把握することでバイ資源の現状とインポセックスの状況を把握し、種苗生産や移植放流など、バイ資源増大を図るための基礎資料とする。なお、平成13年度にも予備調査を実施しており、その結果も合わせて報告する。

2. 研究方法

(1) 聞き取り調査

県内各漁協に対し、過去、および現在におけるバイの水揚げ状況について聞き取り調査を行った。

(2) 漁獲物調査

バイの水揚げが確認されている漁協で漁獲物の買い取りを実施し、インポセックスの状況や、殻長組成調査による新規加入の有無について調査を行った。

(3) 試験操業

漁業がなくなったため水揚げがない地点については試験操業を行い、漁獲物調査と同様にインポセックスの状況や、殻長組成調査による新規加入の有無について調査を行った。

3. 研究結果

(1) 聞き取り調査

10年以上前までは砂泥域を沖合に持つ県内各漁協での漁獲がみられたが、現時点においてバイのまとまった水揚げが確認できたのは江津、益田市の2漁協のみであった。益田市漁協におけるバイ漁獲量は平成3年に2,800 kgを記録したものの、平成5~7年には約200 kgと1/10以下に減少した。そのため、平成8~10年を禁漁とし、平成11年に漁獲を再開したところ、平成11年は1,000 kg、平成12年には2,000 kg以上の漁獲量となった。仮に雌の雄化が原因でバイが減少しているとすれば、数年程度の禁漁期間で過去の水準までに回復するとは考えにくく、本海域における漁獲の減少は漁獲圧による資源水準の低下が原因と判断された。

(2) 漁獲物調査

江津沖、益田沖で漁獲されたバイの測定を行った結果、雌雄比はほぼ1:1で、さらに、1~2歳貝の新規加入が確認された。また、インポセックスの個体は江津沖の漁獲物では全くみられず、益田沖の漁獲物でもほとんど確認されなかった。

(3) 試験操業

鹿島町恵曇沖で漁獲試験(2航海、延べ50個のカゴを使用)を行ったが、バイは全く漁獲されなかった。

4. 問題点

当初の計画では美保関漁協、島根町漁協管内等の県東部でも買い取り調査を実施する計画だったが、漁獲物標本が手に入らず調査できなかった。来年度は市場調査の頻度を高めたり、試験操業を行う等により漁獲物標本を入手する予定である。